

天保10年京都豊年踊りの絵画資料

長谷川 伸三

はじめに

京都豊年踊りとは、天保10年(1839)3月、4月の京都市中の熱狂的な踊り現象をさす。蝶々踊り、赤踊りともいう。前年の豊作で安堵した民衆が、米価の低下を祈念して、今宮神社の地築を名目に、引き物を用意し、揃いの衣装で群参したことに始まる。頭巾をかぶり、男装、女装や、狐、狸、がま蛙、雀、化け物などに扮装したり、半裸になったりしているが、共通したスタイルは、腰に鈴か鳴子をつけることで、秋の豊作を表している。当初京都町奉行所は夜間の踊りや他家への踊り込みを規制したが、尾張藩主徳川斉温(なりはる)の死去を機会に全面禁止とし、4月10日頃ようやく終息した(注1)。

本稿では、この豊年踊りの絵画資料を概括し、その伝播過程や絵画の共通性や特異性を検討したい。特に京都市歴史資料館「天保踊図屏風」については写真をかかげ、関連史料とあわせて紹介したい。絵画資料と文字史料(文書・記録等)との関連の検討は後日の課題としたい。なお絵画の写真に掲載すべきであるが、紙幅の都合でほとんど省略し、写真が掲載されている文献名と頁を注に示した。

1 木版刷り

(1) 大阪府立中之島図書館「豊熟都大踊」・「みやこおどり 鈴なるこの神徳」

豊年踊りを描く木版刷りの絵画として、まず大阪府立中之島図書館所蔵の「豊熟都大踊」と「みやこおどり 鈴なるこの神徳」(「保古帳」14)をあげたい(注2)。前者は一枚刷り、黒一色である。版元は「京新町さはらき町下 金屋新兵衛板」と記されている。後者は文章が主だが、右下に鈴と鳴子が彩色されて描かれている。

この両者は、常陸の農政学者長嶋尉信(やすのぶ)の「佐竹幕下并己亥雑集」(国立公文書館内閣文庫)に書写されている。「豊熟都大踊」の方は、「天保十亥年三月より、都大踊略図」と題され、人物の配置が少し違い、彩色されている(注3)。また江戸の古本屋藤岡屋由蔵の『藤岡屋日記』(東京都公文書館)(注4)や旧松前藩士近藤家文書「都踊鈴鳴子の神徳」(北海道開拓記念館)にも書写されている(注5)。これらの書写された絵に淡彩が加えられているので、木版刷りの「豊熟都大踊」に淡彩を加えたものが流布していたものと思われる。

(2) 早稲田大学附属図書館『町々吉兆都繁栄』

これは木版冊子で、その表紙とさし絵3点がある。この冊子の本文と表紙やさし絵は拙著で紹介してある(注6)。さし絵のおおよそについて再記しておく。

〔表紙の絵〕青・茶・灰の三色刷り、「町々吉兆都繁栄／平安竹林書屋 雀踊堂合梓」の文字と踊る2人の男の画が載せられている。左手の男は布でほおかぶりし、腰に大きな鈴をつけている。右手の男は頭に布をかぶり、腰に鳴子をつけている。

〔さし絵1〕見開きのさし絵で、左手奥に八坂神社の山門、手前に門前の祇園の家並と四条大路、そこで踊る群衆を描く。

〔さし絵2〕これも見開きのさし絵で、多様な扮装で踊る12人の人物を描く。その多くは腰に鈴か鳴子をつけている。特異な扮装として、角兵衛獅子・大名奴・狐・がま蛙などが注目される。

〔さし絵3〕夜更けに踊る5人の人物を描く。いずれも腰に鈴と鳴子をつけている。1人の男は頭に提灯をのせている。夜更けらしさは、闇の空と踊り手がもつ提灯で示されている。

なおこの冊子の本文の著者は、巻末に「于時天保十寅のとし四月／三五園月丸小おどり／してしるす／**」(**は、鈴と鳴子のマーク)とある事から、京都の漢詩人中島棕隠と推測される。中島棕隠は通称文吉、京都の儒学者・漢詩人である。天保踊りに関する著述では、軽薄老人・三五園月丸・柚々斎観阿房山人などと称している。版元は「京新町さわら木町下ル丁／金屋新兵衛板／平安書房 雀踊堂合梓」と明記してある。巻末の「平安書房 雀踊堂合梓」と表紙の「平安竹林書屋 雀踊堂合梓」は、本書の内容に合わせた洒落であろう。

『町々吉兆都繁栄』の本文とさし絵はほぼそのまま、整斎藤川貞『天保雑記』(国立公文書館内閣文庫)に書写されている(注7)。『藤岡屋日記』には本文が書写されている(注8)。

2 図巻・屏風

(1) 大阪歴史博物館「蝶々踊図巻」

紙本着色巻子本で、6.05メートルの長巻である(注9)。「不知舞踏」という題で、半月舎主人による跋文が付けられている。絵の終わりに「天保己亥立夏 華嶽寫」と記されているので、天保10年踊りの流行後間もなく描かれ、作者は小沢華岳である。踊る大勢の男女や子供が描かれている。小沢華岳は没年は未詳であるが、だいたい天保頃の京師の画人。名は定信、初め画を岸駒に学び、のち岸駒の弟子横山華山の門に学び、人物を能くした(注10)。この図巻では、おどる大勢の男女は、「揃いの衣装を着て腰に鈴と鳴子をつけた踊り子と、様々な趣向を凝らした仮装の者との二集団に分かれる。」(福原敏男氏)ことに図巻の中部と後部は、様々な扮装や仮装の人々に占められている。また揃いの衣装の子供たちや、普通の着物姿で踊りに巻き込まれる女たちも描かれている。総じて躍動的な画面で見飽きない。

小沢華岳には天保飢饉のあと、京都の三条河原に設けられた救い小屋を描いた図巻「荒歳流民救恤図」(国立国会図書館)もある。この絵はよく渡辺華山作とされるが、誤りである(注11)。

(2) チェスター・ビーティ・ライブラリー「天保十年豊年踊図巻」

絹本淡彩巻子本で、10.3メートルの長巻である。アイルランド共和国ダブリン市にある美術館の日本画コレクションの一つである(注12)。絵の構成は、「社寺への引物を曳く賑わい、踊りの標準的な服装と芸態、大家への踊り込みと街角の様子、仮装百態、大坂からの踊りの加勢、祇

園茶屋と八坂神社前の踊りの様子」の六段からなる（相蘇一弘氏）。第一段には大幟を立て、揃いの半天姿で社寺への引き物を引く群衆が描かれている。第二段は標準的な服装で前傾姿勢で踊る人々が描かれている。第三段は大店に踊り込む人々が描かれて居る。第四段は様々な扮装で踊る人々が描かれている。狸の仮装をした人物は、「五月前払なし」ののぼりを背負い、手に徳利と酒の通い帳を持っている。第五段は揃いの羽織・パッチ姿の行列を描き、彼らは「浪速」「堂嶋スケ」と書いた張りぼてを掲げている。第六段は上空から俯瞰した構図になっていて、茶屋「一力」の店に踊り込む群衆や、八坂神社の階段をのぼる群衆が描かれている。

相蘇一弘氏は、この「天保十年豊年踊図巻」と小沢華岳の「蝶々踊図巻」や文献史料との照合・比較を行っている（注13）。ここで注目すべき指摘を紹介すると、まずこの図巻の成立を幕末・明治初年、作者は田中有美とし、跋文は城戸千楯の文を「かれいを」が書いたとしている。またこの図巻は同ライブラリーの「天保八年飢民救恤図巻」（注14）とセットとなっているとしている。次に「蝶々踊り図巻」が種々の仮装や芸態で踊る人々の様子を構図化しているのに対し、この画卷は、踊りだけでなく背景をも描き、ストーリー性があることを明らかにしている。なお作者の田中有美が天保年生れであることと、跋文の付記により、この絵は大坂の清水某の依頼により、既存の図巻をもとに田中有美が増補して描いたと推定している。相蘇氏は、後掲の森子求筆「おかげ参り・豊年踊り図（仮称）」を合せて紹介し、これらの絵画や文章が作成された要因を、「天保時代が飢饉と豊年踊りに象徴されるあまりにも特異な時代であり、このことを追憶させるとともに人々の戒めとする目的があったのではないかと指摘している。

小沢華岳と田中有美は、ともに天保の飢饉と豊年踊りを描いている。この世の地獄と天国、苦と楽、悲惨と歓喜という対称的な現象を後世に伝えたかったのであろう。



天保踊り図屏風（六曲一隻）の右（京都市歴史資料館）



天保踊図屏風（六曲一隻）の左（京都市歴史資料館）

(3) 京都市歴史資料館「天保踊図屏風」

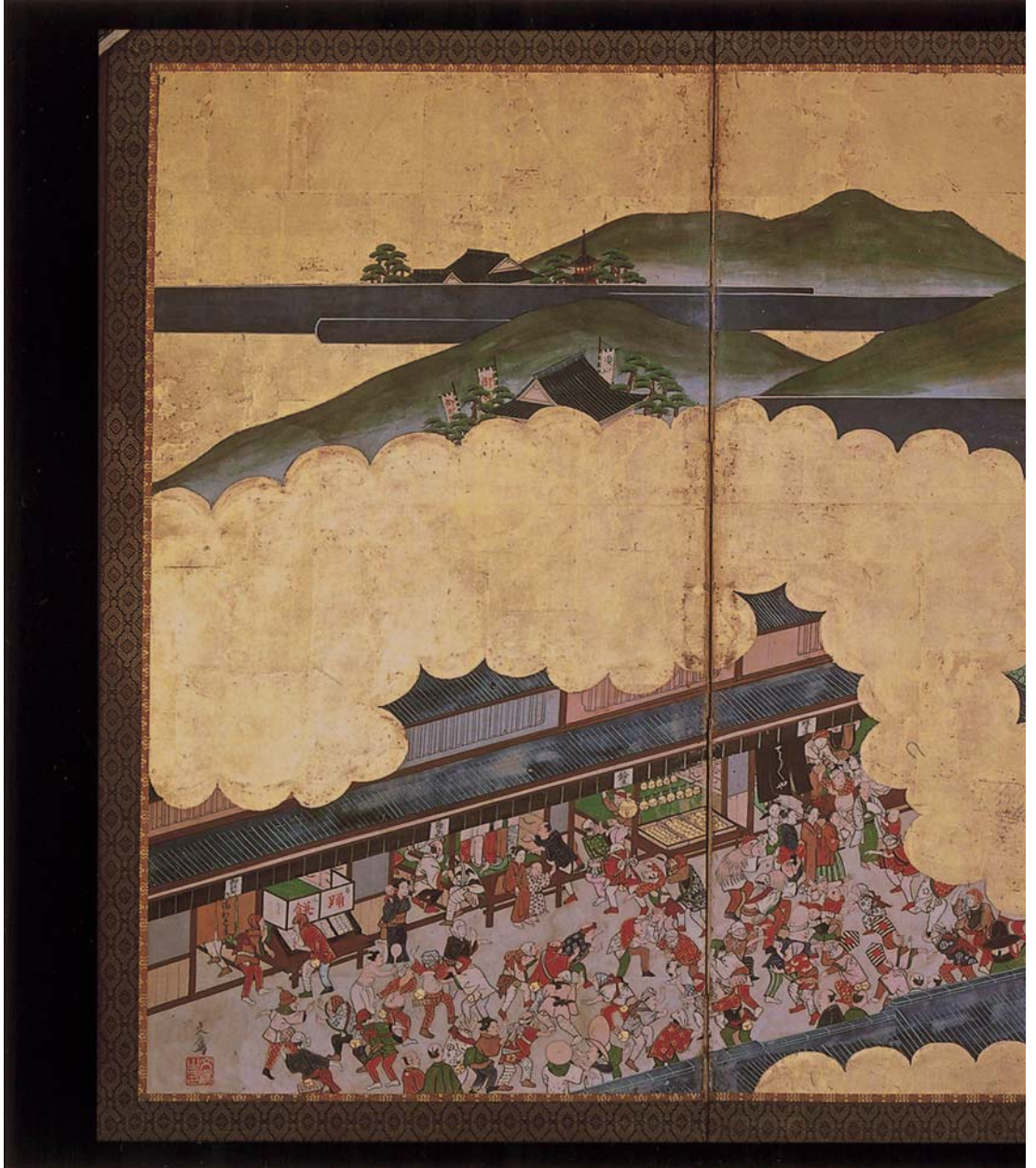
六曲一隻、金地着色図。作者は文鷹。あまり知られていない絵画資料なので、その写真を示しておこう（注15）（別刷り）。空から俯瞰した構図で、金色の雲で場面が三面にわけられている。右面の手前には、伏見街道で踊る群衆と右手に滝尾神社と一ノ橋が描かれている。踊り手は赤い衣装をまったり、異人の格好をした者もいる。一ノ橋の上には、上半身を露わにした力士姿の2人の女がいる。滝尾神社の境内では幟を掲げた男がいる。その幟には、「滝尾社／御地築／踊連」と朱で記されている。中面では後方に八坂神社が描かれている。右手は鳥居の周辺で踊る人々を描く。さらに右に清水寺が見える。中央部には、八坂神社の門前の家並、祇園の茶屋街、加茂川と川端通り、四条大橋と踊る人々を描いている。左面は四条通で踊る人々を描いている。踊り手は赤い衣装をまったり、変装したりしている。腰につけた鈴と鳴子も見える。4軒ほどの店がえがかれている。右手の店は「てうてうや」の大暖簾をかけ、その左の店は「鈴屋」という暖簾をかけた、大小の鈴を並べている。左手の店は、「踊餅」と書いた屏風風の看板を出している。踊りの流行にあてこんだ商いであろうか。遠景は東山の山並で、左奥に頂妙寺（現左京区大菊町）が描かれている。ここにも地築の幟が見える。この屏風絵は、京都の町並みのなかに踊る群衆を描いた点が特徴的である。

前掲の木版本『町々吉兆都繁栄』の冒頭に、「ことし天保十亥の春三月の中頃より、うち日さす都の町に踊てふ事の賑ひあり、其始ハ洛東頂妙寺、洛北今宮、伏見海道滝尾の社の地築、竹田街道の砂持におこり、佛光寺・清水寺の開帳に寄進物を持運ぶに引つづき、皆風流の出立にて、ニワカおどけをまじへ、うかれ騒ぎて市中を通りしより、誰はしむるとなく、遂にハ町中を踊ありく事とハなりぬ」とある。この滝尾神社の地築と砂持ちが、洛東の頂妙寺、洛北の今宮神社の



天保踊図屏風（六曲一隻）の右（京都市歴史資料館）





天保踊図屏風（六曲一隻）の左（京都市歴史資料館）



それとともに、豊年踊りの発端となったという。たしかに画面の中で右面に滝尾神社と地築の幟が大きく描かれているので、滝尾神社の天保10年の修復と地築について検討してみよう。

滝尾神社は現在京都市東山区本町11丁目にある。社伝によると、縁起は定かではなく、もとは洛東豊谷（ろうがだに）に武鶴ノ社と称し、応仁元年（1467）8月の兵火にかかり、多景ノ社と称し、三十三間堂の南、互町より今熊野に通じる南北の坂に移ったという。天正14年（1586）、豊臣秀吉の大仏殿建立によりさらに南の現在の地に移され、宝永年間（1704～10）に、幕府の命で社殿を修理し、滝尾神社と改称した。現在の本殿、拝殿、手水舎、絵馬舎は下村家（大丸呉服店の創業家）の手により、天保10年（1839）から同11年にかけて造立された建物で、1984年に京都市指定文化財になった。社地は伏見街道の東側、一の橋の南詰めにある。東方に泉涌寺があり、同寺との関係も深い。

滝尾神社を訪れたところ、史料「滝尾御宮御再建記」を拝見することができた。屏風絵の画題を理解する上でも有用なので、この史料の前半を紹介したい（史料は長文なので、1行以上の空白で分けられる単位に、便宜上〔1〕～〔8〕を付した）。

（表紙）「滝尾御宮御再建記」

〔1〕

滝尾御宮御造営之事

- | | |
|-----------|-----|
| 一 宝永七寅年五月 | 御造営 |
| 一 元文三年 | 御修覆 |
| 一 宝暦九卯年 | 御修覆 |
| 一 明和九辰年 | 御修覆 |
| 一 天明七未四月 | 御修覆 |

此度は山内より願書被差出、御社内逼ク候故、東へ広ケ度趣ニ付
御相談之上御聞濟、絵図面之通引直し御修覆、尤願書・絵図
面共別ニ有之候

- | | |
|----------|--------------------|
| 一 寛政四申年 | 石大鳥居同燈籠
兼豊君御寄附 |
| 一 文化十一戌年 | 御本社御修覆 |
| 一 天保七申六月 | 御再建御決定 |
| 同九戊戌九月 | 御地面繩張 |
| | 同霜月十五日 下遷宮
掛り初メ |
| 同十己亥十月 | 御上棟 |
| | 同十九日 正遷宮 |
- 今天保十己亥年迄百三十年ニ相成候
後年御修覆有之節ハ此続キ江年月可書記事

〔2〕

- 一 滝尾御宮ハ 御前代様より御信仰ニ而、追々御寄附も有之候所、近年殊之外大破ニ相成候ニ

付、御当君様御再建之志願思召立ニ候得共、不時来其儘年月を歴、延々ニ相成候所、今天保七申年弥御決定、然共是迄の御社ニ而ハ余り小社ニ付、山内江及相談候所、小社を大社ニ致候事ハ、彼是六ツケ鋪訳合も有之趣ニ被申、因而幸ひ貴布祢奥院御再建有之、此古宮を譲り請候願立ニ致候ハ、事軽ク可相済由ニ付、右之趣猶又新規ニ拝所御繕所ヲ附、前拝唐破風作り、御屋根惣檜皮ふき、御棟獅々口、拝殿・絵馬堂・末社・井戸・土蔵并ニ神主居宅共皆造之思召ニ而吹挙を相求、鷹司関白様 梶井御殿江相願候所、無程被為在御許容、梶井御殿より御寄附之御沙汰ニ而、則 天保九戌戌十一月四日天奏江相廻り、夫より所司代・御奉行所江御達し有之、聊無故障御寄附札を頂戴、御社内ニ建候事

梶井御殿

御寄附

[3]

貴布祢奥院御社譲り請之事

一 上加茂於惣会所取引立合

		本店より普請掛り
社家	森三位殿	内田善五郎
		上加茂惣出入
御掛り	中大路若狭守殿	檜皮屋十兵衛
泉涌寺役人		取次
立合	山本対馬殿	本店出入
		檜皮屋三左衛門
御宮代金	貳拾壹兩也	外ニ 金壹兩壹朱
	上加茂社家夫々挨拶入用	
	ノ 金貳拾貳兩壹朱也	

右之通取引相済一札取之置候事

右 檜皮屋三左衛門引合

天保七申年六月

[4]

一 御普請ニ附御公辺願等之義、当方より致候而は事手重ニ相成、且ハ彼是六ツケ鋪可有之、依而泉涌寺へ入魂山より執計之筈ニ相極り候ニ付、方丈様ニも御心配被下候、尤唐破風・前拝・檜皮葺等之義ハ、容易之御免難相成趣ニ候故、御所より御女中方御代参の砌、方丈様より御願被下候ニ付、御取成を以御聞届ニ相成、直ニ 関白様へ被仰渡候所、余り手筋宜過、彼是差支ニ相成候

関白様 鷹司様也御役人ニ

熊沢織部祐様ト申御方

檜皮屋三左衛門弟子之事

与兵衛ト申者

右前拜・唐破風・檜皮葺御寄附御免之御達書附頂戴仕度、御執成之義御願申上、熊沢様ニも色々御心配被下候得共、下より段々願出可申義、上より被 仰渡ニ相成候故、御聞濟ニ相成兼、日間取候迎も鷹司様ニ而は出来致間敷趣ニ而、熊沢様より 梶井宮様御内坊官寺家宰相法印様へ御欠ケ合被下、御同人様御取成ニ而御聞濟ニ相成候、後ニ拝殿・檜皮葺是又同断也

天保十亥十一月

[5]

一 御社地逼く候ニ付東隣続地面

東西六間 南北式拾八間、但し川迄

竹屋卯之助より買得、夫より清き土を掘出し、御社内地上致候事

一 元来地面ハ泉涌寺持年貢地江竹屋卯之助建家被致有之候、依而山内へ引合諸事山より竹屋へ御欠ケ合、古家竹屋へ遣し地面計社地ニ致候、尤竹屋立退永代年貢も無之様山内へ引合 相済申候、若後年彼是申義有之候共此方一切取合無之候事、則此義ニ付出金末々書記有、右ニ付出金も多分ニ而候

[6]

一 天保九戌九月五日、就吉辰

御本社地面取縄張相定候事

一 同十八日東西御役所与力同心衆、其外御見分無故障相済候事

一 同晦日御役所表絵図面願之通無滞御聞濟相成候事、御役所願等前書之通万事山より山本対馬殿引請執計被致候、引続き御普請万端之引合入用諸買物ニ取掛り候事

一 同十一月十五日 梶井宮様御寄附札建申候、御普請取掛り并ニ鍬初目出度相済申候

一 本店、上の店、松原絹店、真集講御千度相勤候

一 同廿六日仮御宮移し無滞相済候

一 御再建ニ付、諸店々、別家、別商買、職方始として、取引先々心持次第寄附頼入候、尤思召無之御方々へ強而御頼候義ニ而ハ無之、此段分ケ而断申入候、然所追々夥鋪寄附有之候

[7]

一 天保十己亥正月廿六日、就吉辰古宮取払、諸方寄附札を建、作事取掛り初メ致候

一 同三月四日より十三日迄砂持相始、門前町今熊村、本町十町目、一ノ橋町、八軒在家町、御用辻子町、右之村々より砂運び被致寄附候

赤飯煮メ御酒出す并ニ菓子

一 同十七日より地築初り、七日之間極晴天、廿三日築仕廻ニ相成、日々大賑ひ、上り物踊り杯相催し、大群衆ニ候、然共聊の無故障目出度相済申候、夫より京町中上下老若男女、不抱昼夜共大踊り始り、始ニハ板メ緋縮緬等ニ而襦袢はつちを拵着し、手拭ニ而面を隠し、足袋之儘草履をはかず、中ニハ五人十人、又ハ十五人廿人揃之衣装もあり、又おもいおもい壱人立の物好も有、追々増長して、緋鹿子縮緬縮ミの儘、天鷲絨織物類、唐物毛織の類迄着致し、大キ成家へハ挨拶もなく大勢押入、土足之儘座鋪見勢台所の無差別踊り込、存分踊り候上、又他之家へ連立踊り込、騒々鋪事四ツ辻ニ立見渡せは、東西南北共踊歩行く人々何にたとゑんものなし、誠ニ美々鋪前代

未聞之賑ひ、其砌今宮御社ニも御普請有之、是も滝尾御宮同様賑ひ、時節とハ乍申、其様ニ京町中一統ニ賑ひ候も全神慮ニ叶候事哉、余り不思儀成事故、後代嘸し種ニもと爰ニ書記し置候、十五六日を過、益増長ニ付、御公辺より御差留被 仰出漸く静り候

[8]

一 同四月中ニ御社下廻廊石築、石垣出来

但し此度はうしろ之谷へ式間余築出し、石垣を積上地形出来、因而下地より北江式間広ク成候

一 同六月朔日御社柱立、同廿二日前拜柱立

夫より作事追々せり立、無油断出情

一 同九月五日御屋根檜皮葺出来上り

一 同十月二日就吉辰御本社御上棟、天气能参詣人夥鋪、大群衆ニ候へ共聊無故障相滞無之相濟候事 尤成丈ひそか大形ニ無之様、呉々世話方江引合置候へ共、

慮外大騒ニ相成困り入候事、則大方絵図ニ記ス

但御備物其外式飾鏝り物、なげ銭餅、夥鋪入用、又作事方之者共へハ酒飯出し、夫々祝儀遣し候事

(中 略)

一 此耄冊後年心得ニ茂可相成哉と書記ス者也

于時天保十四年

西川伝右衛門君隆

癸亥九月

謹書

右大丸本家下村正太郎氏所蔵ノ本書

借受写ス者也

維時昭和四年己巳二月吉日

滝尾神社々掌代理

七十四翁 正八位的場重作藤原資家識 印 印

この史料によると、滝尾神社は大丸呉服店主の下村家の信仰があつく、同家は天保7年(1836)6月に社殿の改築と拡大を希望した。貴布祢(貴船)奥院社の古社を譲り請け、これを本殿とし、拝殿・手水舎・絵馬舎・神主居宅も合わせて新築し、社地も拡大することになった。拝殿は唐破風にし、社殿はすべて檜皮葺にするという豪華な計画であった。費用は下村家がもち、別家や取引先も寄進した。泉涌寺の了承や関白鷹司家や梶井宮家の支援を受け、天保9年9月5日本殿の縄張りを行い、同10年正月26日に古社を取り払い、同年3月3日より13日まで砂持を行った。砂持は門前町の今熊村・本町十丁目・一ノ橋町・八間在家町・御用辻子町の人々が砂を運び、寄附した。同年3月17日から23日まで地築を行った。この地築が思いがけない踊り騒ぎに発展し、今宮神社の砂持・地築とあいまって、京中をまきこむ豊年踊りになったとしている。ただし、豊年踊りの終焉を「十五六日を過、益増長ニ付、御公辺より御差留被仰出漸く静り候」

としているが、他の多くの史料は、豊年踊りの終焉を4月10日か12日としているのと相違している。なお同年10月2日日本社の上棟が行われ、大勢の参詣人が集まった。「慮外大騒ニ相成困り入候事、則大方絵図ニ記ス」とあるので、この上棟の様子も絵図にしたというのであるが、この史料には絵図が付けられていない。こうして見ると、先の屏風絵は、滝尾神社の地築から発展した豊年踊りを描いたもので、下村家が絵師に注文したものかと思われる。

(4) 国立歴史民俗博物館「蝶々踊り図屏風」「蝶々踊り図」

この2点は「館蔵史料データベース」に公開されている（注16）。

「蝶々踊り図屏風」は、二曲一隻の屏風絵で、縦70.0cm、横154.0、紙（彩色）。右曲は、約20人の人物が踊っている。上部の5人は半裸の様子である。3人は揃いの羽織をまとっている。他の者はほぼ頬かぶり、上着にパッチの姿である。全員腰に鈴と鳴子を付けているようである。左曲は14人の人物が踊っている。7人ずつの群が少し間をあけて競っているようである。半裸の男が1人、他は緑色の上着に赤いパッチが多い。全員頬かぶりをし、腰に鈴と鳴子を付けている。両曲ともに画面の左下に署名と落款がある（注17）。

「蝶々踊り図」は20名ほどの人物が踊っている図で、大部分は覆面をしており、神主姿や半裸の男もいる。衣装は赤い上着とパッチの者が多く、黒い上着に別の色や模様のパッチの者もいる。踊りの群が×型になっているのが特徴的である。ホームページ上の画像を見ただけなので、詳細な検討は後日に期したい。縦51.4cm、横83.2cm、紙（彩色）。「館蔵史料データベース」の備考に「天保10年（1839）、京都において流行した蝶々踊りの様子を描く。箱蓋裏書きが文献的に貴重であり、同時代に京都の知識人が記したことがわかる。」とある。

国立歴史民俗博物館には「大新板都蝶々踊り飛廻双六」も所蔵されている。縦32.5cm 横42.3cm、紙。「館蔵史料データベース」の備考に「京松原通 本屋吉兵衛板、天保10年京都蝶々踊りの瓦版史料。」とある。瓦版としては初めての絵画資料といえよう。ホームページに画像が示されていないので、図柄や構成はわからない。

(5) 藪本家蔵「おかげ参り・豊年踊り図」

この資料を紹介した相蘇一弘氏によると、「天保期のできごとを絵と文章でまとめた条幅」で、「筆写は森子求と言う人物」で、「京都の人かと思われるが、『平安人物誌』などの人名録にも名はなく」とある。「この条幅の下部には文政十三年（天保元年、一八三〇）全国的に流行したおかげ参りと、（中略）天保十年（一八三九）京都で流行した豊年踊りの様子が淡彩で描かれ、その上部に三段にわたって、おかげ参り・京都大地震にはじまり、天保四・八年の飢饉、豊年踊りに至るまでのできごとを年代記風に詳細に記している。」ともある。また注記に「原史料に名称がなく、仮に「おかげ参り・豊年踊り図」と称する。絹本淡彩、森子求筆（おかげ参り図の部分のみ応夏筆か）、一〇九×五五・五寸」とある（注18）。応夏は木下姓、円山派の画家で京都の人、弘化4年（1847）36歳で没している（注19）。豊年踊りの図は、十数人の大人と2人の子供が踊っている。なかに蛸の扮装をした者もいる。

3 冊子のさし絵

(1) 『浮世の有様』（『日本庶民生活史料集成』第11巻）

大坂斎藤町の医師が著した『浮世の有様』巻九「天保十年雑記」中の豊年踊りの記事の終わりに、男女一組の踊り子の絵が載せられている（注20）（図1）。

(2) 『未刊甲子夜話』（原題「甲子夜話三編」）

前平戸藩主松浦静山著『未刊甲子夜話』（原題「甲子夜話三編」）巻之五九に豊年踊りの記事がある（注21）。その追録の部分で、「また一片紙ノ摺版ヲ獲、亦其事態ヲ観ルベシ」として、日の丸の扇等を手に踊る一群を描く図が載せている（図2）。次に「又団扇ヲ示ス者アリ、コレモ其状ヲ知ルベシ」として、踊り子3人の男女（うち1人は老婆）の絵と、一言翁老人書の扇背の戯文を載せている（図3）。松浦静山は豊年踊りを描いた刷り物や団扇を手に入れているのである。

(3) 愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫『天保視聴記事』

『天保視聴記事』は、天保期の風聞を多数あつめた4冊本で、第1冊の冒頭に豊年踊りの記事がある。内容は狂詩・狂歌・触書などであるが、6頁分の極彩色の豊年踊りの絵が含まれている。



(図2) 『未刊甲子夜話』（原題「甲子夜話三編」）巻之五九



(図1) 『浮世の有様』巻九「天保十年雑記」



(図3) 『未刊甲子夜話』（原題「甲子夜話三編」）巻之五九

この絵は他に類例が無いもので、拙著の口絵にカラーで紹介した（注22）。その絵を各頁ごとに紹介しておこう。

[1] 背景に樹木。踊る11人の男と2人の女。男のうち、二人は狐の仮装、他に鼠の仮装や天狗の面をつけた者もいる。衣冠束帯の者もいる。2人が頂点に瓢箪をつけた吹き流しと幡をつけた長鉾鎗を捧げ持っている。

[2] 背景に川。踊る4人の男、2人の女、1人の唐子姿の少年。ほぼ全員が腰に鈴と鳴子をつけ、男は頬かむりをしている。1人はひょっとこの面をつけている。

[3] 背景に川、松の木と桜の木。踊る5人の男と3人の女。女は全員ぱっちをはいている。男は頬かむりをしているが、1人鉢巻の若者がいる。

[4] 踊る8人の男、6人の女。男の1人は僧侶の服装である。

[5] 背景に桜の木。踊る9人ぐらいの男。その1人は神主の服装である。踊りに巻き込まれかけた2人の女と供の小僧。手前に犬3匹。

[6] 背景に松や桜の木と鳥居。踊る4人の男と1人の女。

この6枚の絵は右から左へ連続しているようであるが、人物は1頁毎にまとまった群像として描かれている。全体に踊る人々がダイナミックに表現されている。

(4) 愛媛県大洲市立図書館矢野玄道（はるみち）文庫、越智直澄著『天保踊之記』

『天保踊之記』は、内題は「天保十己亥年三月中旬比より京都流行兆々おとり」と記された半紙判の冊子である。幕末・明治前期の国学者矢野玄道の蔵書に収められている。豊年踊りに関する多様な記事が収められているが、ここでは絵図に限って見てみよう（注23）。

[1]「京都流行踊の図」。図中に「柏四郎版」とあり、越智直澄が「京都市街売歩行候板行」を天保10年6月10日に書写したもの（2頁分）。踊り子3人の絵。

[2]「みやこおどり 鈴なるこの神徳」。例の一枚刷りを書写したもの。

[3]「板行一枚摺ノ写」と題し、軽薄老人の狂詩と踊り子2人の絵（4頁分）。

[4]「京都狂歌連板行一枚摺写」。狂歌26首と絶句1篇を収めている。文末に「右者京都狂歌連之摺ニて、踊の絵入見事なる摺也。画略レ之。己亥五月十七日写レ之 直澄」とある。残念ながら踊りの見事な絵の刷り物は書写されていない。

[5] 踊り子の絵と歌詞3曲（5頁分）。大きな鈴をかついだり、踊る8人が描かれている。

[6]「衣装品類荒増」は、豊年踊りの衣装・小間物類を図入りで説明している。小間物類としては、頬冠・パッチ・足袋・手襷・腹当・腕拔・帯・犢鼻褌・鈴并りん・手拭等があげられている（5頁分）。

[7]「夜分組々目印行燈・挑灯如レ図」は、提灯や手燭を図入りで説明している（5頁分）。[6]とともに、他の史料に見られないものである。

『天保踊之記』の末尾に、「右重疊踊の図より、山田源利謹の集るものを以て写レ之、己亥六月十日 越智直澄」とある。「重疊踊」は「ちょうちょう踊り」のことである。なお越智直澄はどういう人物かはっきりしていない。

(5) 大阪府立中之島図書館『寝ぬ夜のすさび』(写本)

この本には、踊る一對の男女(女装と男装)が描かれている(注24)。なお『新燕石十種』第5巻所収の『寝ぬ夜のすさび』(国書刊行会、1913年)には絵が掲載されていない。

む す び

本稿では、まず京都豊年踊りに関する木版刷りの資料を検討した。京都で発行された一枚刷り「豊熟都大踊」・「みやこおどり 鈴なるこの神徳」(大阪府立中之島図書館)や木版本『町々吉兆都繁栄』(早稲田大学附属図書館)は、この踊りの情報を各地へ伝える役割をはたした。たとえば後者は、『天保雑記』(国立公文書館内閣文庫)や『藤岡屋日記』(東京都公文書館)にはほぼそのまま書写されている。次に図巻・屏風の資料を検討した。図巻としては、「蝶々踊図巻」(大阪歴史博物館)と「天保十年豊年踊図巻」(チェスター・ビーティ・ライブラリー、アイルランド共和国ダブリン市)が双璧をなしている。また「天保踊図屏風」(京都市歴史資料館)について、カラー写真をかかげ、関連史料をあわせて紹介した。最後に冊子のさし絵を検討した。なかでも『天保視聴記事』(愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫)のさし絵は図巻に匹敵し、『天保踊之記』(愛媛県大洲市立図書館矢野玄道文庫)は、踊りに使われた衣装や提灯・手燭などを図入りで説明している。これらの絵画資料は、文字史料(文書・記録等)とあわせて、豊年踊りの実状を詳細に明らかにするであろう。

[付記] 京都市歴史資料館「天保踊図屏風」に関して、同館と豊村輝男氏に掲載を許可いただき、お礼申し上げます。また同館の宇野日出生氏と滝尾神社の佐々貴信美氏のご教示にも感謝しています。

注

(注1) 長谷川伸三「京都豊年踊」(『日本歴史大事典』1、小学館、2000年)。

(注2) 福原敏男「蝶々踊り小考—近世上方都市世相史(一)—」(『大阪市立博物館研究紀要』第16冊、1984年)30頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003年、85頁に写真(カラー)。

(注3) 長谷川伸三著『近世後期の社会と民衆—天明三年～慶応四年、都市・在郷町・農村—』雄山閣出版、1999年、211頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003年、85頁に写真(カラー)。

(注4) 長谷川前掲書、202頁。鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第2巻、三一書房、1988年、85～86頁に図。

(注5) 長谷川前掲書、206頁。

(注6) 長谷川前掲書、231～236頁に本文、237～238頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003年、86頁に写真(カラー)。

(注7) 長谷川前掲書、205頁に写真。福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第

16 冊、1984 年) 27～29 頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003 年、86 頁に写真 (カラー)。

(注 8) 鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第 2 巻、三一書房、1988 年、85～87 頁。

(注 9) 福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第 16 冊、1984 年) 15～20 頁に写真。同「幕末京都の祝祭的世界—『ちょうちょう踊図巻』—」(小松和彦他『絵画の発見』平凡社、1986 年) 口絵に写真 (カラー)、113・119 頁に写真。同「普請・砂持ちの風流—京都の事例を中心に—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 33 集、1991 年) 220～222 頁に写真 (カラー)。相蘇一弘「踊る民衆と幕末社会」(『大系・日本 歴史と芸能、第 10 巻、かぶく民衆 都市の祝祭』平凡社、1991 年) 74～79 頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003 年、84 頁に写真 (カラー)。

(注 10) 沢田章編『日本画家辞典・人名篇』1927 年、大学堂書店、1970 年 (再版)。

(注 11) 長谷川前掲書、第二部補論「虚説「渡辺崋山が天保八年に京都で救い小屋を造った」」、255～264 頁。

(注 12) 相蘇一弘「天保十年の京都豊年踊りについて—アイルランド、チェスタービーティコレクション「豊年踊図巻」を中心に—」(『大阪市立博物館研究紀要』第 22 冊、1990 年) 63～67 頁に写真。福原敏男「普請・砂持ちの風流」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 33 集、1991 年) 215～219 頁に写真 (カラー)。平山郁夫・小林忠監修『秘蔵日本美術大観 5 チェスター・ビーティ・ライブラリー』講談社、1993 年、図 62-1・2 に写真 (カラー)、230・231 頁に写真、271・272 頁に解題 (相蘇一弘)。国文学研究資料館・チェスター・ビーティ・ライブラリー共編『チェスター・ビーティ・ライブラリー絵巻絵本解題目録』勉誠出版、2002 年、図録篇 171 頁に写真、解題篇 225～227 頁に解題 (田村憲美)。

(注 13) 相蘇一弘「天保十年の京都豊年踊りについて」(『大阪市立博物館研究紀要』第 22 冊、1990 年)。

(注 14) 相蘇一弘「天保十年の京都豊年踊りについて」(『大阪市立博物館研究紀要』第 22 冊、1990 年) 62 頁に写真。『秘蔵日本美術大観 5 チェスター・ビーティ・ライブラリー』講談社、1993 年、図 61-1～3 に写真 (カラー)、229 頁に写真、269～271 頁に解題 (相蘇一弘)。『チェスター・ビーティ・ライブラリー絵巻絵本解題目録』勉誠出版、2002 年、図録篇 169・170 頁に写真、解題篇 223～225 頁に解題 (田村憲美)。

(注 15) 「庶民のエネルギーひしひし／「天保踊り」の屏風絵／中京の商店に残存／四条通中心に克明な乱舞姿」(『京都新聞』1987 年 7 月 29 日号、20 面)。福原敏男「普請・砂持ちの風流」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 33 集、1991 年) 224～226 頁に写真 (カラー)。

(注 16) 国立歴史民俗博物館ホームページ「館蔵史料データベース」。

(注 17) 『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術博物館、2003 年、84 頁に写真 (カラー)。

(注 18) 相蘇一弘「天保十年の京都豊年踊りについて」(『大阪市立博物館研究紀要』第 22 冊、

1990年)、61頁に写真。

(注19) 沢田章編『日本画家辞典・人名篇』1927年、大学堂書店、1970年(再版)。

(注20) 谷川健一他編『日本庶民生活史料集成』第11巻世相一、三一書房、1970年、539～540頁。福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第16冊、1984年)29頁に写真。

(注21) 坂田勝校訂『未刊甲子夜話』第三、有光書房、1971年、117～122頁。中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話三編』第5巻、東洋文庫、平凡社、1983年、137～143頁。

(注22) 長谷川前掲書、口絵(カラー)。福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第16冊、1984年)26～27頁に写真。『図録・おかげまいりとええじゃないか』豊橋市美術館、2003年、87頁に写真(カラー)。

(注23) 鎌田道隆「民衆運動としての天保踊ー『豊年踊之記』をめぐってー」(『芸能史研究』第54号、1976年)66～78頁に史料全文と写真。福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第16冊、1984年)21～25頁に写真。

(注24) 福原敏男「蝶々踊り小考」(『大阪市立博物館研究紀要』第16冊、1984年)29頁に写真。